

## 空思想概論(前編) 私は有るのでもなく、無いのでもない

みなさんは空思想をご存じだろうか。仏教の根本思想の一つである。空思想の象徴的なものが般若心経である。278文字の中に空思想の本質が説かれている。端的に表現すると色即是空空即是色である。「世の中の全ては空であり、空が世の中の全てである」という意味になる。空思想の神髄や般若心経の解説は次回以降に譲り、今月から3回に渡って龍樹の『中論』を中心に空思想の基本を考察したい。この空思想の本意を掴み取ると、人生がとても生き易くなる。前編では「空思想の基本と名称と形態への執着」について、中編では執着や渴愛を創り出す「十二縁起と空」の関係について、後編では本当の意味における「因果の法則と空」について解説をしたい。空を要約すると「全ての事象は変化し続けるから、こうでないとダメだ、これが正しい、何で私がこんな体験をするのか、と云う執着をすると苦悩する。だから何かに執着せずに、流れに身を委ねて生きる事が苦悩を乗り越える生き方である。」と表現できる。お伝えした事はこの言葉に尽きる。しかし理屈では理解できても実践することは難しい。私も執着から離れられず、空の状態で生きれない事が多い。従って今回は絶典の和訳言語をそのまま記載した部分が多くある。また表現を変えて何度も同じ要素を繰り返し記述した。難解な文章が連續すると感じる方もいるかもしれないが、それには当然、意図がある。人の存在を理解するのは難解である。何故人は苦しむのか、何故生きているのか。難解な問題に対処するとき、難解な事象を避けてはならない。平易な表現ではない箇所が多くあるが、解説部分で出来るだけ分かり易い解説を心掛けた。そして様々な事例や仏典を引用しているが一々理解しようとしたことだ。何となく雰囲気で、ぼーっとして感覚的に読み進めるのが一番効果的である。

まず空とは何か、その概念に触れてみよう。「無」と「空」は違う。「無」とは何もないという意味である。「空」は常に縁によって移り変わる世界である。常住不变なものは、この世の中に何も存在しないのだ。全てのものが変化し、移り変わる。それがこの世界である。「空」の教えは、全てのものが空に帰すから、つまり全ての事象は変化し続けるので、何ものにもこだわりを捨てよ、という無執着を教える。肉体も精神も実体はなく(つまり縁に依って仮に形成されているのだけなので)、世の中の全ては人が考えた「観念」に過ぎないのだ。例えばあなたの片腕が無くなったら、あなたは存在しなくなるのか?また身体は数ヶ月毎に新陳代謝を繰り返し、お肌は一般的に25歳を過ぎると劣化し続けるではないか。心は外的刺激によって一喜一憂し、常に変化し続けるではないか。固有の変化しないもの、つまり実体は存在しないのだ。

更に全てのものが無常(つまり一つとして留まることを知らず変化し続ける状態)であり、縁起によって他に相互依存して存在する。あらゆるものは関係の中で成り立つので、物質が存在するというよりも、関係が存在する。これを「縁起」と云う。私たちは関係性において仮に存在しているのだ。食物連鎖が良い例だろう。常に互いの関係性において存在し、連鎖しているのだ。一匹の蟻は昆虫に捕食され、その昆虫は小鳥に捕食され、その小鳥はより大きな鳥に捕食され、その大きな鳥は大蛇に捕食され、その一匹の大蛇は大群の蟻に捕食されて、世の中は常に連鎖しているのだ。互いの関係性において存在するのだ。関係性で成立するのは、食物連鎖だけではない。世の中の全ては関係性で結果を得ているのだ。成功の秘訣は何かと問われると、成功者ほど「運が良かっただけだ」と云うのは通例である。成功者も失敗者もごくわずかな者を除いては、誠実に努力をしながら生きている人が多い。しかし成功と失敗が分かれるのは関係性によるものである。偶然インフルエンサーに会った、偶然師匠に会った、たまたま直接的間接的なサポートを多くの方々から貰えた、たまたまそのチャンスを得る場所や順番に居たという様な、偶然という「必然の連続性の関係」の中で、私たちは人生体験を得ているのだ。

一般的に成功者と云われる存在になるためには、環境が大切である。(宿命+環境) × 在り方 = 運命の環境である。環境が人に与える影響はとても大きい。どんな家に生まれたのか。どんな両親に育ま

れたのか。どんな教育を受けたのか。どんな社会地域で育ったのか。この先天的環境が人に与える影響は計り知れない。先天的環境は過去の事なので受け入れるしかない。大切なのは後天的環境の作り方である。善き環境を得る為には「日々の在り方の積み重ね」が必要である。今日の前にある環境で与えられた事が出来ない者は、どんな環境に行っても、その環境が教えてくれる大切な事を受け取る資質を有していないので、人生が上手くはいかないので。善き環境や善き人と出会う為には、または導かれるためには、今日の前にある環境で一所懸命にやるべき事を積み重ねる事だ。主婦なら家事を、組織人なら与えられた業務を、経営者であればお客様のために、やるべき事をコツコツと積み重ねる事だ。まるで薄紙を積み重ねるが如くに。薄紙を1枚積み重ねても何も変わらないように感じるが、ある一定期間積み重ね続けると確実に違いが出てくるのと同じである。無意味な行為は一つもないのだ。悪因縁を積み重ねるか善因縁を積み重ねるかは、この瞬間の在り方一つで決まるのだ。従って過去がどうであれ、今この瞬間から心を入れ替えればいいのだ。人はいつでも成長できるのだ。1つの業界に最低10年、業務経験を積みなさいと、私は師匠から教わった。「石の上にも3年という言葉があるが、あれは基礎が分かるだけだ。5年経験するとやっと1人前になる。10年その業界を経験して、初めて本当の力量が身に付くのだ」と教わった。何をやっていいか分からぬ、天職が見つからないという方とお会いする事がある。そのご質問には「今ある環境で最低10年、頑張りなさい」と回答をしている。私の恩師曰く「その環境に10年以上積み重ねられる力量が無い者は本物には成れない」そうだ。さて話を元に戻そう。仏教本来の教えとは「縁起」の事で、「空」は「縁起」と同じものである。「空」は「縁起」を強調したもの、あるいは、「縁起」の論理的帰結と云える。「縁起」とは「～よって起こること」で、具体的には「不安や苦しみは、何らかの原因や条件、つまり因縁によって起こり、その原因や条件が無くなれば、不安や苦しみも無くなる」という事である。「縁起説」は、不安や苦しみを生み出す苦しみの根源をさぐりあて、それを滅する事により苦しみを解消する事を目指すものである。この「縁起説」つまり十二縁起の詳細は来月の中編に解説を譲る事とする。

空概念を理解する上で「分別と無分別」が重要となる。分別と云う言葉は誰もが知っている言葉だろう。ただし一般的に私たちが理解している分別と仏教用語の分別は意味が違う。一般的な使い方は、妻に暴力をふるう夫がいれば「無分別な事をするな」といさめ、ドラ息子に向かって親が「お前もいい歳をして分別を持て」と叱る。一般的なこの言葉の使い方は「世事に関して、常識的な慎重な判断をする事」(岩波『国語辞典』)という意味で使っている。しかし空は分別があるから苦しみを生み、無分別である事が幸せに生きる要素だと説いている。龍樹の『中論』第18章第5詩節には次のように記されている。「業と煩惱と滅するが故に、之を名付けて解脱と為す。業と煩惱とは實に非ず。空に入れば戯論滅す。」これを意訳すると「行為と煩惱が尽きることに安寧がある。行為と煩惱は、計らい(分別)から生じる。それらの計らいは「多様な想い」による。そして多様な想いは空性において滅せられる。」ここで戯論という言葉が出てくる。これは多様な想いという重要な意味合いである。私たちの煩惱の究極的な原因を「ひろがりの意識」に求め、その「ひろがりの意識」は想いによって起こると定義している。ひろがりの意識は diversification(多様化)と訳し、多様化した概念を意味する。その「多様な想い」は、あらゆるものに実体が無い、換言すれば、あらゆる事象が空であり、世の中の表象が全て虚妄(つまり嘘、偽り)である事を理解すれば苦惱が消え去る。それが心が安心して幸せに生きる道であると、龍樹は定義しているのだ。難しい表現が続いているので難解に思うかもしれないが、とても大切な要素である。まず分別は「判断」と理解していいだろう。多様な想いを持ち様々な判断をする事が、汚れた煩惱と迷いの根源であると定義しているのだ。分別、つまり多様な想いからくる判断を否定しなさいと教えている。これは正しい、この人は嫌いだ、これはこうあるべきだという言語に依る多様な判断が、私たちに苦惱を与えてると龍樹は説いているのだ。分別を与える事に依る、判断を越えた境涯を目指す仏教は言語を超越した寂靜の境地に導いてくれるのだ。言語は人類を発展させたが、それと引き換えに大きな制約も課してしまった。言語はとても大切であるが、雑多な言語に囚われてはいけない。本当の言語、つまり真言に触れることが大切である。

さて密教寺院が何故、極彩色で彩られ、和太鼓やシンバルを鳴らすのかご存じだろうか。究極の悟りは言葉に出来ないからである。悟りとは、ある感覚的なものであり、それを言語形態で説明できないから、直感に訴えかけて悟りの境涯を伝えようとしているのである。この言語形態が前述した分別に繋がる。分別は判断とみなしてよい。どのようにして判断をするのかと云うと、言葉を与える事によって判断を得るのである。例えば私という言葉を例に挙げよう。「私」が居るから、「私以外」が存在するのである。では「私」とは一体何か？みなさんには「私」をどの様に認識しているだろうか。ここに人生観が生まれ、その人の価値観が生じる事になる。経典『スッタニパータ』第756偈には次のような記載がある。「見よ、神々ならびに世人は、我ならざるものに我ありと考へ、名称と形態に執着している。彼らは「これこそ真理である」と考へている。彼らがあるものある仕方で考へても、それはそれとは異なったものと分かってくる。なんとなれば、その考えはそのものにとって虚妄であるから、過ぎ去るものは虚妄の性質をもつ。」ここで「我ならざるものに我あり」という句は、私でないものを私であると、勘違いしてしまっているという意味である。しかし、その他の句を読み込んでも、私は存在していないと積極的に否定もしていない。つまり、私は私で有り、私は私では無いのである。つまり「私は有るものではなく、無いのでもない」のだ。私はこうであると言葉を与えた瞬間に、私はそう有り、私以外の多様な他者が存在してしまう。私は無いと言葉を与えた瞬間に、私は存在せず、私が存在しないので私以外の他者も存在しない。自他一体、全ての根源は一つであり、違いは無いという世界観になる。だから「私は有るものではなく、無いのでもない」のだ。つまり、どんな言葉を与えるかによって、私は有る存在ともなり、私は無い存在にもなるのだ。

さてここまでいくつかの経典を引き合いに出して、空思想の初步を解説してきたが、空思想は「言葉への不信」と密接に結びついている。一般的に我々が云うものの本質とは、実はそのものの「名称(つまり言葉)」なので、本質や実体の否定は名称、つまり言葉の実体視を否定する事になる。つまり言葉はあいまいであり、実体では無いと言い切っている。「リンゴは美味しい」という言葉は、人によって受け取り方が違うのだ。言葉の与え方は同じ言葉を使っても、人によって価値観が違うので「あいまい」なのだ。従って「リンゴは美味しい」という実体は無いのだ。リンゴは美味しくもあり、美味しいくないのであるのだ。言葉によってある事象が認識され、良い悪い、幸不幸、好き嫌いが分別される。従って言葉の与え方が大切になってくる。この人は好きこの人は嫌い、これは苦手これは得意と云った判断が、不安や迷いや苦悩の根本になるのだ。私と判断した時に私以外の他者が存在し、その他者や社会からの刺激により、不安や迷いや恐れを作り出してしまうのだ。何かに言葉を与えると、その真反対のそれを否定する概念が存在するからである。何かが存在するのは、表裏一体が大前提であるからだ。以前に講義をしたインタービーイング(相互共存)と同じ構造である。少し話がそれるが、分別という観点は陰陽論と対立してしまうのではないかと疑問に思う方もいらっしゃるかもしれない。これは成長レベルの違いに応じて使い分けるものである。分別と無分別は、言葉の与え方次第で認識が変わる。従って本来は中庸で、全ては良くも悪くもないと云うのが本意である。本来は無分別であるべきだが、いきなりそのレベルで生きる事は鍛錬が必要なので、どうしても分別をしてしまう。どうせ分別をするのであれば、力量が身に付くまでの処世術として、肯定的な側面からの分別を持つと生き易いだろう。その上で本当の意味での力量が身に付くと、一極二元論に分別しなくとも、本来の意味である無分別の領域に成長するという成長プロセスを説いているのだ。話を本題に戻そう。この計らいは、価値判断を例にとれば分かり易いだろう。人でも物でも、あるものを「これは好き」、「これは嫌い」と判断すると、その判断の上にその対象に執着したり、逆にそれを避けたりする煩惱と行為が起り、そこに迷いの人生が生じるのである。龍樹はこの計らいの根源は「多様な想い」、鳩摩羅什は「戯論」と訳した。いずれにしても原語プラバンチャは、ある単一なものが様々に発展することを意味する。本来は單一であった我々の意識が、多元的に複数に発展する事であり、單一で全体的であった直感の世界を、言葉を与える事によって「複数な概念」に分割する事である。ここで注釈を入れておく。多様性が悪くて單一性が良いと云っているのではない。良い悪いの世界観ではなく、人の苦惱は多様性

があると想い込んでいる事にあると云いたいのだ。更に言い換えると、人の苦悩は言葉の使い方で決まると表現しても良いだろう。どんな言葉を使っているかで人生の幸不幸が決まるのだ。

更に言葉が悪いとも云っていない。言葉で文化は形成され、ホモ・サピエンスは複雑な言語形態を構築できたから進化したのだ。仏教は言語への不信があると定義した。しかし勘違いして欲しくないのは、仏教の云う言語への不信は、一般社会通念の中での単一的な一般言語への不信である。発想を変えると、一般言語も複数の言語を習得すると多角的なものの見方を習得出来る。従って母国語以外の言語習得は、人としてもビジネス上でも豊かである。一つの言語では表現し得ない表現が他言語には存在するからだ。更に一般社会通念の中での言語だけで思考すると、つまり真言を知らずに無知な状態で思考すると、自分勝手な稚拙な多様な想いで心が支配され人は苦悩するのだ。その意味での言語への不信を仏教は2500年前から抱いていたのだ。いつもの悪癖で、ああ疲れた、これは不利だ、私には無理だ、ここに私の居場所はない、私は無能だ、人は裏切る、誰も私の事を分かってくれない等の不平不満的な稚拙な言語の与え方は苦悩を創り出すのだ。ここでお伝えしたいのは、あれやこれや考え込んでしまう自分の勝手な思い込みを戯論と定義し、それが苦悩を生み出すという事だ。仏教はその意味での言葉の与え方に対する不信を持っているということなのだ。例えばある一つの事象に対して好き嫌いが人それぞれに違う様に、人によって言葉の与え方が違い、何が本質か定義出来ないからだ。善し悪しは、人の言語の与え方一つで左右されてしまうからだ。だから書き言葉を与えるために、密教は真言を、帝王学は格言を伝授し、(株)多聞は「まいにち帝王学」で今日の一言を配信しているのだ。

手塚治虫の作品『ブッダ』に、ブッダが7年弱の苦行を止めてスジャータから乳粥を貰った有名な場面が描写されている。その後、あることからスジャータは瀕死の状態になる。ブッダはスジャータを救うために、スジャータの心の中に入っていく。するとブラフマン(梵天様)が現れ、ブッダに次のようなレクチャーをする。「命は、あるエネルギーの集合体でしかない。身長が高い低い、容姿が良い悪い、才能が有る無い等は些細な違いでしかない。人間の体はただの器でしかない。その器でしかない体を自分だと勘違いしている。その体という器の中にエネルギー(つまり魂や業)が入っているだけだ。そのエネルギーもあの世で、他のエネルギーと融合し分離しを繰り返している。(いわゆる靈魂分離融合論だ)その娘を救いたければ、あのエネルギー一体の中で、その娘と何処か似通ったエネルギーの「カケラ」を持っていくがいい。その娘は生き返るだろう。」【その魂のカケラが宿命の陰占で表現されている事を、みなさんは理解していらっしゃるだろうか】つまり、私たちはあの父親との関係、あの母親との関係、夫や妻、子供、ビジネスパートナーとの関係に大いに悩んでしまうが、それはただの執着でしかないのだ。別の同じような似通った何かが存在し、それでなくてもいいと理解できた時、ステージアップするのだ。例えば父親に愛されたいと思っていたが、実際の父親との関係において今世それは難しくとも、父親に似た波動の、他の方との関係の中で、父親との愛情を育むことは出来るのだ。執着しない事が大切なのだ。様々な条件と云う縁起が重なって、たまたまその対象が父親となっただけであり、その関係性に執着すると苦悩を生むのだ。従って、その人でないとダメだという事はないのだ。違う存在との関係の中で、十分に欠けた心や不安を満たすことは出来得るのだ。



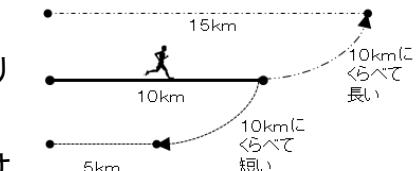
『中論』の注釈家チャンドラキールティは、次の例えによって空を説明している。飛蚊症の人が居たとしよう。飛蚊症とは、眼の前にチラチラと蚊のようなものが飛び交って見える症状である。何でこんなに蚊がいるのだろう、とイライラしたり目をこすったりするが、どうしても蚊はいなくなる。友人に蚊が飛んでいると訴えると、それは蚊が居るのではなくてお前の目が悪いから影が見えただけだと教えた。なるほどどうかと分かりはしたが、相変わらず蚊は飛び回って見える。眼医者で受診し治療をしてもらったら、蚊が居なくなった。さてここで、これは何であったかと考えてみよう。蚊は見えていたけれども、実際に蚊は存在していたわけでは無い。治療した後で蚊は見えなくなったが、元々蚊が居たわけではないから、蚊が居なくなった、とも云えない。初めから無かったものが、無くなるわけではないからだ。すると、この蚊は居たので

もなく、居なくなつたのでもない、としか云えないのだ。空とはそういうことである、とチャンドラキールティは解説している。この観点で思考すると、私たちの存在も「私は有るのでもなく、無いのでもない」という今回のテーマが理解できるはずだ。私たちは私が固有の存在として存在していると想い込んでいるだけなのだ。まるで飛蚊症の症例が如くに。その想い込みは、私の存在そのものだけではない。この世の中の全ての事象は飛蚊症と同じ症例だという前提で、この現実世界を見直したとき、誰と結婚しようが、いつ死のうが、他者からどんな評価を得ていようが、それは全て勝手な想い込みでしかない幻想の体験でしかないのだ。つまり、誰と結婚してもいいし、いつ死んでもいいし、他者からどん評価を受けようが全ては自分の勝手な想い込み、幻想で体験した事でしかないのである。そしてそれは関係性、つまり縁起によって導かれるだけなのだ。その縁起の流れが宿命表に記載されているのだ。

龍樹は先述した第7詩節で空の真理は生じたものでも滅したものでもないと教えている。ここでは生と滅を矛盾概念として扱っているので、これは生じたものではなく、生じていないものでもない、と言い換える事が出来る。そしてあるものについて、生や滅とするのは、あくまで人間の概念、つまり言葉に関わるものであって、ものそのものは、生じたものでもなく、生じていないものでもないという事になる。すなわち、ものそのものは人の概念や言葉を超えており、その意味で空であると定義しているのである。チャンドラキールティの例えでも蚊は有ったのでもなく、無かったのでもないのだ。要するに空の真実は人間の概念や言葉によっては認識されない特徴を持っているのだ。私たちの存在や仕事やお金や評価は飛蚊症の蚊の如くなのだ。見える者には見えるし、見えない者には見えないのである。その視点で眺めると、人生の全ては勝手な想い込みで起こっているだけなのだ。名称と云う概念を与える事によって、ただの幻想に一喜一憂しているのだ。

空とは無いという事ではなくて、「有るのでもなく無いのでもない」という意味であることは前述した通りだが、相対性の観点からも論じてみよう。例えば長と短で考えてみよう。10キロメートルは、5キロメートルに比べれば長いが、15キロメートルに比べれば短い。すると10キロメートルには長と短とのいずれかの本性があるわけではない事が分かる。本当は10キロメートルは長くもあり短くもあるのだが、これはそのまま長くも短くもない事と同じである。長くもあり短くもある、という事は「ある長さ」には距離という実体が無い事を意味する。しかしそれは長さが無いという事でもない。だから10キロメートルには距離は無く、また距離が無いのでもない、という事になる。例えばランニングを趣味にした人が居たとする。最初の数ヵ月は10キロメートルも走るのは不可能に近い事に思えたが、毎日のランニングの積み重ねで、今となっては10キロメートルを走るのは日常の習慣となり、10キロメートルを走らないと物足りない位いになるのと同じだ。新入社員の頃、全く出来なかった業務を突き付けられ私は無能だと落ち込んでいたが、その業務を10年も積み重ねると簡単な業務になってしまふのと、全く同じ類の事である。ものが相対性、つまり一極二元論であるのはそういう事だが、空も相対性と言い換える事も出来るのだ。

実体や本質とは減価しない恒常的なものを云う。しかし現実世界の全ては常に変化する無常なものである。本質は自己同一性を保つが、この「同一性」と「変化」とは相対概念である。私たちが変化を考えるとき、同一性を前提にしている。同一性という時には、変化に対する同一性を考えている訳である。「変化する」とは、「何かが変化する」のであって、この「何か」がないときには、「変化」は考えられないのだ。その「何か」が同一性にあたるのである。だから同一性がなければ変化は考えられないし、変化を考えずに同一性を問題にする事も出来ないのである。言葉は、常に世界を二つに分ける要素がある。Aといえば、A以外のものに二分される。これは私たちの言葉の持つ基本的な性質である。そこで私たちはAを考えたり、語つたりするときは、必ずその背後に非Aを予想し、前提にしているのだ。しかしそれは私たちの言葉による判断の習慣であって、実はAと非Aとが実在すると考えると、たちまち矛盾が生じる。Aという自己同一的な本質が、なぜ変化するのかという事になるからだ。幸せな結婚があるはずなのに、不幸せな結婚が存在



する。やり甲斐のある仕事があるはずなのに、やり甲斐のない仕事が存在する。幸せな結婚や、やり甲斐のある仕事が「実在する」と考えると、それは自己同一性であるはずだから変化しないはずなのに、真逆の現象も存在し得る矛盾があるので。つまり幸せな結婚も不幸せな結婚も、豊かな人生も貧しい人生も、生き甲斐も虚しさも、存在するし存在し得ないので。ここで例示している事は、とても重要な要素である。自己同一性とは不变であると云う事である。幸せな結婚、安定した人生があるはずだ、誰か自分にとって良い人と出会えるはずだと、言葉で概念を与えると、それが実体であるならば、ずっと幸せな結婚生活をし、安心した安定した人生があるという事になるのだ。それは現実を直視すれば、存在しない事が理解できるはずだ。私たちは、ある事象の表裏の片方に言葉を与える事で、その片方が存在すると勘違いしてしまうのだ。幸せな結婚生活を一瞬体験しても、次の瞬間不幸せな結婚生活を体験し、常に変化し続ける。やり甲斐のある仕事を体験しても、次の瞬間、虚しい仕事を体験し、それは交互に連續性を持って変化し続けるのだ。ある瞬間を切り取ると、幸不幸の一側面があるが、連續性を見たときに幸不幸の繰り返しをしているだけなのだ。だからこれでないとダメだという執着が、人生を狂わせてしまい苦悩を味わうのだ。一般的に多くの人は、自己同一性(つまり普遍的なもの)があると勘違いしている傾向が強い。私たちが信じている普遍的なものは時代によって変化する。例えば天動説と地動説、貨幣価値、社会体制、時間の存在、カレンダー、一般社会通念は、その時代背景によって変化するではないか。従って、これは本質で普遍的であると想い込んでいるものは、世の中には存在もするし、存在もしないのが事実なのだ。要は自分の勝手な想い込みで、その様に感じているだけなのだ。如何に儲けるか、如何に売上を伸ばすか、如何に優位に生きるか、如何に知識や技術を活用できるか、如何に幸せに生きるかを思考するのは、空思想から論じると愚の骨頂であるという事になる。みなさんはこの領域の視点を見出し、受け入れらるだろうか。陰陽五行論塾も如何に活用するのか、如何に有益な情報を得れるか、それを如何に実生活に落とし込むかという観点で観ると、大切な真実を見失ってしまう事になるのだ。お伝えしたい事、ご理解頂けるだろうか。勘違いして欲しくないのは利益を出してはいけない、技術や知識を活用してはいけないと云ってはいない。苦悩の無い人生を歩むためには視点を変えなさい、生きる枠組みをシフトしなさいとお伝えしているのだ。だから受け入れるか拒絶するかも、あなた次第だ。俗世間の一般常識の中で生きていると不安や恐れや苦悩を得ますよ、だからそこから脱却するために、基本的な視点を変えなさい、その上で安定した生活をしたり、良きパートナーを得たり、利益を作り出しなさい、階層構造が違うと申し上げているのだ。まずは全ては空であるという人生の土台をしっかりと作り、その土台の上に利益・安定・幸福を乗せる順序を経ていきなさいとお伝えしているのだ。空思想の概念はご理解頂けただろうか。言葉の与え方で人生が変わるので。人生は言葉で出来ていると換言してもよい。だから品性の高い、純粹な聰明さを司る玉堂星世界に幸せがあると陰陽五行論は教えているのだ。

売上	結婚	幸福	健康	理念
人生の土台は空である (すべては変化する)				

ここまででは言葉の与え方一つで、現実の受け取り方や人生体験が大きく変わる空現象の原理について述べてきた。ここからは実例を挙げて解説をしてみよう。私共の会社に石川佳代という社員がいる。日干支48番の辛亥、寅卯天中殺の宿命である。とても靈力の高い干支を持っている。今年の4月に社内合宿を行った。合宿後に、私宛に彼女から2通のメールがあった。本人の許可を得て、そのメールを記載する。言葉の与える概念が如何に人生に影響を与えるかの良い例である。内容は違っても、みなさんも彼女と同じような概念、つまり言葉の与え方を人生の中で行ったことがあるはずだ。彼女は次のような言葉、概念を人生に与えている。

小池先生、お疲れさまです。合宿後から色々内省して、自分が「誰の事も愛していない事にする」と遠い昔に決めた事に気付きました。口では何と言っても人は嘘をつくし裏切ることを知っていたから、好きな人からそれをされるよりは、せめて好きじゃない人からそうされた方が耐えられる。だから「私は誰の事も愛していない」という前提を持つことで、自分の許容量以上に傷つかない様にブロックしていたのだと思いま

ます。自分が自覚しているよりもずっと傷ついてきたようで、先生が私のことを「脆すぎる」と仰っていたとの意味が、今になってよく分かりました。理で生きる事にして、情で生きる事を封印していたから、人からの愛情深いというフィードバックを受け入れられませんでした。最近はそう言わると胸が痛くて泣きそうで、それは多分「本当の事に気付かせないで」という痛みだったと思います。余計なブロックをせず、乗り越えないといけないし、ただ在ればいいのだと、そして昔のように傷つくことを許可しなければいいと、頭では理解していますが、痛みが邪魔をして、心が拒否しています。ここまで拒絶反応が起こること自体、自分でも不思議です。(明確に傷ついた記憶がないので…。)自分と向き合っても、痛過ぎて涙が止まらなくなります。先生のようになりたいという気持ちと、なりたくないという気持ちがあって、なりたくないというのは、愛情深い先生と同じように人を愛することで、自分がまた傷つきたくないという感情が起因だったのかもしれません。先生は愛情深くて本当に凄いなど他人事のように思っていましたが、自分とは違うと、わざと乖離させていたのだと思います…。どうすればいいのかよく分かりませんが、今まで感じてこなかった痛みを、ここで味わい切るしかないのかなと思っています。目をそらさずに向き合っていきます。(変な特技ですが)私は内省が得意なので、合宿できっかけを頂いた為、すぐに自分の課題の核心にたどり着いてしまいました。内省して後悔したのは初めてでした。正直なところ、気付きたくなかった部分で、そこを認めてしまったら、今までの私の生き方を全部否定して、もう一度やり直さないといけない、傷つき易い自分を守るために、小さい頃に無意識に張ったブロックを、今になって外したらどうなるんだろう…、はっきりと記憶にないのに、刻まれた痛みだけが思い出されて涙が出ます。自分が乗り越えられると信じて、あらゆる痛みを、今は日々、甘んじて受容します。

このメールに対する私からの返信です。佳代、何度もこのメールを読み返しました。私も胸が張り裂けそうな気持で一杯になります。佳代は、善き内省をしています。人は多かれ少なかれ傷付きながら生きています。その原因が明確に分かる場合、解決は早いです。ただし佳代や私のように、決定的なこれだという傷付く起因がなく、日常生活の様々な体験からくる痛みや恐れは「社会からの痛み」と云います。またその結果「社会への怒り」が出てきます。世の中や他者は、所詮こんなものだと思い込んでしまいます。またそう生きないと、痛み続けてしまうからです。人生にどんな「言葉」を与えていたか。その言葉の与え方・心の在り方で、その人の人生の価値が決まります。人生に生きる価値を与えるものは何か？それは自分の言葉の与え方で、その「人生の価値」が決まっていきます。日々、自分にどんな言葉を与えていたかで、人生に生きる価値を与えるものが変化していくのです。今、この瞬間に何を思うのか、どんな言葉を与えているのか、どう在るのかで人生の価値が決まっていきます。佳代はまだまだ危ういですが、その危うさと同じくらいに大きな可能性も秘めています。佳代の成長がとても楽しみです。

この私からのメールに対する彼女からの返信です。小池先生、なんとなく子供の頃の自分の思考が分かってきたので、長くなりますがお伝えさせて下さい。私の体感では、自覚なく嘘をつく人も、私の話を聞いていない・分かってくれない人も、等しく私を裏切る人(信じられない人)とざっくり認識していたような気がします。攻撃性があったのは、裏切られるのが怖くて、分かってもらえないのが寂しくて、でも傷ついているのがバレたら駄目だ、という自己保身の為に、攻撃に転じていたんだと思います。人間観察が趣味だったのも、目の前で対峙すると怖いけど、本当のその人の事を知っておかないと怖いから、ショーウィンドウ越しに、一定の距離を置いて人を観察していました。当時は自分が特殊だと全く思っていなかったし、母親からお前は平凡で面白くないと言われ続けたので、「私は分かるのに、どうしてみんな、この人の外面に騙されるんだろう？」と不思議に思うと同時に、話しても分かってもらえない寂しさと怒りを持っていました。自分自身にすら隠していましたが、対人恐怖症なのだと思います。そう気づくと、今とても人が怖いです。私の人を見抜く力は、人のずるさ(不誠実さ)に一番反応するのですが、それも結局、自分を守るために身に付けた力だったんですね。小学3年くらいに「しらけてる」と担任に評されました。その頃は既に人の内面を読んでいた気がします。(子供に興味もないのに、なんで先生してるんだろう？とか思ってました。)

子供の頃に身につけた処世術なので、もういい加減捨てないといけないな…と頭では考えられるのですが…。矛盾と嘘と裏切りと寂しさと渴愛と、父の無関心さ、母からの否定、学校の先生への不信、いっそ死んだら楽なのにと思っていたこと…。思い出すだけで痛いので、子供の自分には抱えきれなかつたんだろうと、自分の事ですが可哀想になります。人の痛みに共感する事が多いのは、私自身が知らず知らずたくさん傷ついたからなんですね…。これも全て、私が私の宿命を開花させる為に、自分で選んだ生まってきた環境なのだと思います。少なくとも頭でそう理解できる事が、今の救いです。まだ自分で自分の取り扱いに困っている状態なので、こうします、と胸を張って言えませんが…、少しずつ弱い自分を受け入れて、向き合っていきます。

ここまでが石川佳代とのメールのやり取りである。彼女の場合、幼少期の環境や体験から自己防衛の為に、いくつかの「言葉」を与え、外からの刺激に対する「概念」を作り出した。そしてそれは意識的に言葉の与え方を変えていかない限り、永続的にその恐れや不安や悲しみの世界を見続ける事になる。彼女の場合、人生は渴愛に満ち、人は不誠実で裏切り、私を傷付ける存在で、ありのままの自分で生きると傷付いてしまうから、論理的に攻撃性を持って、露悪的に生きる方が傷付かなくて済むという概念を言葉で作り上げていき、無意識レベルでそれを生きて来たのだろう。

これは彼女だけの話ではなく、内容は違って多くの人が同じように自分なりの言葉を与え、自分が傷付かないように自己防衛する概念を砦として作り上げている。私たちは環境や体験や内容は違っても、その刺激から同じように不安になり、悲しみ、傷付き、苦しんだ上に、ある言葉群を与え、これ以上そんな体験をしないように、ある概念を創出するのだ。その言葉の与え方一つで、その人の人生の世界観がまったく変わるのである。だから同じ体験をしても、同じものを食べても、同じ講義を聞いても、人によって言葉で作り上げた概念がまったく違うので、違う体験として取り込んでいくのである。人が信じられない者は、ずっと信じられないのだ。お金が全てだと言葉を与えた者は、際限なくお金が必要なのだ。安定や安心が欲しい人は、安定や安心が無いと恐ろしくなるのだ。そして龍樹は云う、その言葉は不確かであり、幻想であると。だから本当のことを知りなさい。無明(無知)からくる言葉の与え方は、人生に苦悩を創り出す。だから無明から抜け出しなさい。全ては空であると知りなさい。好き嫌い、信じられる信じられない、上手下手と云った、あいまいな言葉の概念に囚われてはいけないと。全ては移り変わり行くものであり、固定的な自己同一性のあるものは存在しないので、幸も不幸も無く、安定も不安定も無いのだという事を知りなさい。言葉の与え方の変化で、人生が変わることを理解しなさいと、龍樹は説いている。

私自身も渴愛の苦しみを感じて生きていた。私の場合は親さえ居ないこんな私に何の価値があるのか、という言葉を与えていた。他者と違う事に、そして人が去っていく事に強烈な恐れを感じていた。7歳の時、2週間ほど一緒に生活した実母と引き裂かれた体験から、母からの愛や愛される豊かさは知った。しかし引き離される痛みが、愛を知る前より痛過ぎたので、人を愛することを止めようと思った。十二縁起の愛に該当する。従って渴愛が起こり執着が起こる。どうやったら、一瞬でもいいから愛されるのかと、いつも考えていた。この愛されない不安や孤独をどうしたらいいのか、どうしたら愛されるのか、心の欠けた部分を満たす執着に幼少期から苛まれていた。至った結論は、親にさえ捨てられてしまう位に自分には価値がないから、人以上に努力をして、人以上に自分を磨いて、人以上に魅力的になれば不安は消える。魅力的であれば、人は去らないはずだ。そうすれば自分の居場所が確保できると、私の場合は言葉を与えたのだ。だから魅力的になりたいと、ずっと願い続けてきた。その源泉は自分の渴愛、執着を満たすためであった。帝王学は人のお役に立った時に初めて本当の幸せを感じると定義しているが、その源泉は執着が無いこと、無私である事、見返りを求める事が大前提である。私の場合はその執着をそぎ落としてきた「つもり」になっていた。しかし気が付くと体と精神を壊してでも、仕事に没頭し、人のお役に立ちたいという渴愛の執着心が、いつの間にか動いていた事を否めない。今回の倒れた現象は、その執着から抜け出るレッスンであったと考えている。私の場合は「魅力的でなければ人が去っていく」という言葉を与える

ことで、愛されない恐れ、渴愛への執着心を満たす概念を作り上げた。体と精神を壊してでも仕事で成果を創り出し、人のお役に立つという極端に振ることで、ある一瞬の満たされる体験をする、そして次の瞬間はもっと大きな仕事の成果や他者のお役に立っていないと満たされない状態がやってくる。だからそれを満たしたくて、もっともっと、体と精神を壊してでも仕事の成果を創り出し、魅力的な存在でありたいと願い、自分に言葉と概念を与え続けてきた。その言葉の概念を生きるのを止めて、中庸のど真ん中に生きる時期であると云うメッセージを受けたと自己内省している。ユング派の国際分析資格をお持ちである医師とお話をする機会を頂いた。その先生曰く「あなたは今まで出会ってきた誰よりも浮世離れしている。そしてあなたが云う魅力が必要だという概念に関しては、どれだけ魅力的であろうが、去る者は去るし、去らない者は去らない。あなたが魅力的であろうがなかろうが、そういう事は起こるのだ。」とおっしゃった。このお言葉は私にとって素直になるほど！と受け入れることが出来た。どんな言葉を与えているのか。これがとても大切である。私は魅力的であろうがなかろうが、去る者は去るし去らない者は去らない。愛される者に愛され、愛されない者には愛されない。私は私で、ただ在ればいい。渴愛の執着を満たす必要もなく、ただこの瞬間を私が在れば愛は満たされると、素直に受け入れられる機会であった。すると自分の力量以上の成果を創り出す事も、自分の器以上の魅力を放つ必要もない、ただ今の自分の器と力量で生きればいいのだと感じることが出来る。必要以上に人の期待に応える必要もない。非常に大きな学びとなつた。

ここまで理論をまとめていこう。結婚したら幸せになる、子供を育めば幸せになる、仕事で成功すれば幸せになるという「名称と形態」に執着するから苦悩が始まるのだと、龍樹の空思想は主張する。これを陰陽五行塾に当てはめてみよう。学理と帝王学は両輪である。例えば、学理の現実的な応用の仕方が分からぬという言葉を与えるのは、その幻想を創り出してしまう。人生の他の場面でも同じレベルで言葉を与えてはいるはずだから、同じレベルの体験をしていると推測できる。学理は自分で自分の人生に適応し、応用し、実践するから力量が身に付くのであって、個々人でその実践の仕方は違う。学理の応用の仕方が分からぬと言葉を与えてはいる人は、他のどんな理論を学んでも、その現実的応用をしない。それがどれだけ、具体的にマニュアル化されていてもだ。どんなに手取り足取りレッスンを受けても、その言葉の与え方では、力量が身に付かないだろう。私は師から学理を教わったが、具体的な応用の仕方を手取り足取り教わったことはない。自分なりに現実適応させていく練習をしただけである。くどいようだが、龍樹の主張の通り、どんな言葉を人生に与えているかで、人生体験が変わってしまうのだ。世の中に実体、つまり変化しないものは存在しない。全ては自分の勝手な思い込みであり、幻想を見ているだけである。どうせ幻想を見るのであれば、まずは肯定的な言葉を与えなさい。そして力量が身に付いたら、全ては空で移ろいゆくものだから、人生の事象に執着する事なく、こうでなければならないという概念を捨てなさい。全ては空であり、縁起である。ある偶然の出会いと条件の重なり合いで、ある結果が生まれているだけである。その空の事象に対して「言葉」を与え、執着する事が原因となり苦悩が始まるのだ。その原因である言葉の与え方を変える事である。結婚や出産をしたら幸せになる、家族が居たら幸せである、孤独は不幸である、低所得は虚しい等々、これらの一般概念の言葉に縛られている内は、本来の幸せを体現できず、苦悩に苛まれ続けるのだ。言葉の与え方を陰陽五行論の帝王学が説いてくれるよう、自分の意識をシフトさせていく事である。全ては関係性の中で動かされていくのだから。その関係性は十二縁起で解説が出来る。十二縁起と空の関係に関しては、来月の中編に譲ろう。まずは空思想の根本を理解する事だ。世の中の全ては、自分の勝手な思い込みで体験しているだけで幻想でしかない。それは言葉の与え方の癖で決まるのだ。まずは言葉の与え方の悪癖を是正せよと、お伝えしているのである。そして陰陽五行論の世界観から空思想を観ると、言葉の概念を超越した領域が陽転者と云われる世界である。人生に生きる価値を与えるものは何か。それは各自の言葉の与え方で変化するのだ。従って、愚痴を言わずに、奇麗な言葉使いを意識することである。ほんの少しの意識の違いで、人生が大きく変化してしまうのだ。